

園長通信

イメージキャラクター

ふたぶう

高槻双葉幼稚園50周年を記念して誕生しました。幼稚園で子どもたちを見守ってくれています！



2024.08.01

園長 岡部 祐輝

「暑さをもとに、自分事として考える」

連日、記録的な猛暑、酷暑となっており日々の体調管理など大変難しい状況が続いていることかと思えます。皆様いかがお過ごしでしょうか。幼稚園では、現在1号認定の園児は夏休み期間となり、2号認定保育及び預かり保育が継続して行われている状況です。

連日の猛暑は子どもたちの遊びにも影響を与えています。例えば、熱中症アラートなどが発令されている場合、遊ぶ場所や遊び方などを変更するなど、日陰や涼しい場所を中心に遊ぶなど対応することがあります。「今日は暑そうだから」など主観的な、そして個別性の高い判断だけではなく（このような勘・感覚も保育の文脈では大変重要な時もちろんあります）、客観的な指数、特に熱中症対策では、「WBGT（湿球黒球温度）」といわれる数値を計測したり、また「学校における熱中症対策ガイドライン作成の手引き（環境省/文部科学省）」をもとにしたりしながら、できる限り子どもたちの遊びが充実しつつも、安全に配慮もする形で展開をしています。

第3章 暑さ指数（WBGT）について

暑さ指数（WBGT）とは

- 熱中症の危険度を判断する環境条件の指標に暑さ指数（WBGT：Wet Bulb Globe Temperature：湿球黒球温度）があります。
- 暑さ指数（WBGT）は、人体と外気との熱のやりとり（熱収支）に着目し、熱収支に与える影響の大きい①温度、②日射・放射など周辺の熱環境、③気温の3つを取り入れた指標で、単位は、気温と同じ℃を用います。
- 暑さ指数（WBGT）は、運動環境や労働環境の指標として有効であると認められ、多くの学校において屋外での体育の授業の実施や休み時間の外遊び、部活動の実施の目安として用いられています。
- 暑さ指数（WBGT）は、右に示すような暑さ指数（WBGT）計で測定します。暑さ指数（WBGT）は、温度や湿度などの複数の環境要素を合わせて測定しているため、場所や時間により、値が変動します。活動場所ごと、活動時間ごとに測定することが大切です。



暑さ指数（WBGT）測定装置

暑さ指数に応じた注意事項等※1

暑さ指数 (WBGT)	注意すべき生活活動の目安※1)	日常生活における注意事項※1)	熱中症予防運動指針※2)
31℃以上	すべての生活活動における危険性	高齢者においては安静状態でも発生する危険性が大きい。外出はなるべく避け、涼しい室内に移動する。	運動は原則中止 特別の場合以外は運動を中止する。特に子どもの場合には中止すべき。
28～31℃	中等度以上の生活活動における危険性	外出時は炎天下を避け、室内では室温の上昇に注意する。	軽微な暑さ（軽い運動は中止） 熱中症の危険性が高いので、激しい運動や持久走など体温が上昇しやすい運動は避ける。10～20分おきに休憩をとり水分・塩分の補給を行う。暑さに弱い人は運動を軽微または中止。
25～28℃	中等度以上の生活活動における危険性	運動や激しい作業をする際は定期的に充分に休憩を取り入れる。	警戒（積極的休憩） 熱中症の危険が高くなるので、積極的に休憩をとり適量、水分・塩分を補給する。激しい運動では、30分おきくらいに休憩をとる。
21～25℃	強い生活活動における危険性	一般的に危険性は少ないが、激しい運動や重労働時には発生する危険性がある。	注意（積極的な水分補給） 熱中症による死亡・重傷が発生する可能性がある。熱中症の兆候に注意するとともに、運動の合間・休憩時に水分・塩分を補給する。

※1) 日本体育学会が厚生労働省に提出した熱中症予防指針 Ver.3(2021年5月)
※2) 日本スポーツ協会が厚生労働省に提出した熱中症予防指針 Ver.3(2021年5月)
運動前には十分な水分補給を行い、スポーツ現場では個人差や環境的に配慮する。
※3) 暑さ指数は、場所や時間により、値が変動します。活動場所ごと、活動時間ごとに測定することが大切です。

※1 環境省「夏季のイベントにおける熱中症対策ガイドライン2020」
※2 環境省「熱中症予防情報サイト」(<https://www.wbgt.env.go.jp/>)

- 暑さ指数（WBGT）計がない場合には、環境省が熱中症予防情報サイト※2で公開している、日本各地の暑さ指数の実測値や推定値を目安の参考値として、活用することができます。

（出典：学校における熱中症対策ガイドライン作成の手引き（概要版）（環境省/文部科学省））

このようないわゆる「予防」、「何か起こる前の手立て」を周囲の大人が適切に考えることに加え、現在の教育、保育の中では、子ども自身が「自分事として考えること」、「既存、既習の知識や事項をほかの場面などに活かしていくこと」、「危険に気付く力」、「安全な生活を自ら営もうとする力」を培っていくことも重要となります。これまでの通信の中でも述べさせていただいている通り、「受け身」、「指示」、「知識を知る」だけでは身につけていくものではありません。例えば、「知ったことをもとに行動してみると良さや重要性を感じる事ができた」、「危険に気付く事ができたこと、その後のネガティブな経験を自分で回避する事ができた」などの能動的な経験が重要となります。例えば「水分補給をしたら一日元気に遊ぶ事ができた」などはそれにあたります。そのためには大前提として「知る機会」、「経験する機会」が必要となります。

「リスクに対して自分事として、そのリスクと向き合い、行動していく機会・経験を大切にする」という姿勢は、年々重要になってきていると教育・保育現場にいてつくづく感じています。

行事の中に存在する「遊び」の要素

7月18日（木）に当園では年長「ふたぷっ音楽会」という取り組みがありました。この取り組みは、1学期に各クラスで音楽遊びや、楽器に触れる経験を通して、取り組んできたことをご家庭の皆様に見ていただく場です。特にこの取り組みで大切にしていることは、「どのようなことを自分たちは見てもらいたいと思っているのか」、「どのような場所で音楽会をしたいか」ということを考えながら進めているところにあります。音楽会といえば楽器の練習を毎日繰り返し行い、きれいな、そろった演奏をめざすというような達成目標を描く方もおられるかもしれませんが、幼児教育で大切な原理原則的の考え方は、「興味関心をもって主体的に取り組むこと」や、「自分たちで思いや考えを共有し自分の行動を考えること」などが行事や集団で取り組むことの場面でも大切になります。ゆえに、この取り組み期間では「楽器に触れる」ことや、「みんなで音を出し合い聞き合い、奏でる」活動だけではなく、「会場をどのような形にするか」、「見てもらうときにどのような工夫をするか」などの話し合いも同時に行われていきます。

ある日園庭を歩いていると、写真のような表示、矢印と出会いました。



建物沿いに矢印があり、ずっと進むとホールへの入口へ。そこからさらに中に向かって矢印が伸びていました。なるほど・・・。音楽会の会場であるホールまでの道筋を示していたようです。会場に入ると子どもたちが作った看板もあり、自分たちで合奏や歌を歌うだけではなく、会場に関する環境や、来てもらう方々への思いや考えをもとに表現する、物を生成しようとする姿が見られました。このように、「日々の保育時間を調整して行事に特化して行う」ということではなく、「行事と日常の保育が行き来すること」、「日常の保育や日々の興味関心が行事とつながり反映されていること」などをこれからの行事でも大切な考え方として持っていきたいと園では考えています。